

昔々ひとりのスルタンがいた。彼には一人息子がいた。その子供は父親の富のおかげで、今まで特に困難なことに出逢ったことがなかった。彼は学業を終えて、父親の仕事を引き受けるようになった。スルタンは息子に助言した：「もし結婚するなら処女でなければいけない」。スルタンはそれ以上は説明をしなかった。息子はスルタンの許で最初の女性を紹介し、言った：「これが私の愛する女性です」。彼の父は尋ねた：「彼女は処女か?」。彼は「いいえ」と答えた。

しばらくして彼は 2 番目の女性を紹介したが、彼女も処女ではなかったので、スルタンは彼に、それもお前に必要な女性ではないので探し続けるよう言った。

スルタンの息子は父親の要求にうんざりし始め、3 番目の女性を見つけたが、その女性は処女だった。スルタンは喜び、町中に息子の結婚を知らせた。彼は、自分の友人で、年頃の娘を持つ他の町のスルタンに招待状を送ったが、そのスルタンは都合が悪く、結婚式に来られなかった。

或る日、スルタンは息子に、ひとつの部屋だけを除いた、富の一部を見せた。息子は旅に出て、その間にスルタンは死の床に就いた。彼は義理の娘に、秘密の部屋も含めてすべての富を見せた。死ぬ前に息子に見せる時間がなかったからである。息子は戻ると、父親が妻に見せたものについて質した。彼女は、彼が旅に出る前に知っていた分についてだけ話し、秘密の部屋のことは話さなかった。ところで、父親のスルタンの友人は、スルタンが莫大な富、金やダイヤモンドなどを所有していたことを知っていた。

時は過ぎて、スルタンの息子はさっぱり訳がわからなかった。彼は妻が日増しに太ってくるのに気づいたが、彼らは辛うじて生活をしていたのである。彼らは財産を使い果たしたが、彼女の方は夫の知らぬ間に、スルタンの宝を全部わが物としていた。彼女はとうとう、仕事を探しに行けと彼を家から追い出した。

彼は長い間歩き、ある村で仕事を見つけた。その村は父の友人の村だった。彼は畜産家になった。彼の名前はムラマリだった。彼が触れたものはすべて良く育った。動物達は大きくなり、彼の小さな店は繁盛した。スルタンは、この若者がスルタンの息子としての教育を受けたのではないか、そして自分の友人の息子ではないかと思った。スルタンは若者を呼んで、素性を明かすよう命じた。

ムラマリはすべてを語った。するとスルタンは尋ねた：「お前の父親は結婚する前に何か特別な忠告をくれたか？」。彼は答えた：「はい、処女と結婚することです。私は最初と2番目の女性を見つけましたが、3番目が処女でした」。スルタンは疑わしげな様子で言った：「そうか、お前に娘の面倒を見る責任を与えよう」。

しばらくして、スルタンは娘を、信頼していたムラムリと結婚させた。スルタンは彼に約束させた：「お前には彼女と寝る権利も、孕ませる権利もない」。結婚した後、娘は、夫が何故彼女に無関心のままでいるのかわからなかったが、ムラムリは何も言うことが出来なかった。

時が経って、彼は欲望に身を任せ、妻を孕ませた。妊娠が進み、とうとうスルタンの知るところとなった。彼はムラムリを呼びつけて言った：「今ここで我々の協定は終わりだ。今夜お前を殺しに来る」。ムラムリは間際に迫った死を憂い、妻にすべてを語った。夜が来て彼らは床に入り、スルタンが婿を殺すために剣を携えて部屋に入ってきた。スルタンは、娘が同じように剣を振りながら反撃しようとしているのを見た。そこでスルタンがムラムリに言った：「お前は私の娘が処女であることがわかったろう。だから、彼女はお前のために私を殺そうとしているのだ。お前は3番目の女が処女だと父親に嘘をついた、或いはそれは誤りだった。彼女がお前を何故裏切ったのかわかっただろう。私と一緒に来い。お前について行こう。お前に戻ってくるすべてを取り返すのだ。お前の父親のことはよく知っていた。彼は親友だったのだ」。

彼らは町に着いて、彼の最初の妻が家の入り口にいるのを見つけた。彼女は余りにも太り過ぎて動くことすら出来なくなり、使用人たちが身の回りの世話をしていた。彼らは彼女の許しも請わずに家の中に入った。彼らは秘密の部屋に入って、殆ど手付かずの財宝を見つけ、それを取って去って行った。